



「伝える」こと

公益財団法人日本植物調節剤研究協会 常務理事

田中 十城

私の実家は農家です。時期になると父から度々除草剤に関する相談を電話で持ち掛けられます。80才を超えていますので、商品名、処理時期、薬量、希釈の具体的な方法については音声でなく、SNSを使って母のスマートフォンに文字で回答しています。ただ、方言や自身が名付けた名前、或いは名前も分からず形態的特徴を話されることもあり、雑草を特定できずに回答を断念する場合があります。

スマートフォンを利用すれば雑草名をネット検索したり、写真を撮影して送信することもできるのですが、それらの操作を遠隔地に住む後期高齢者へ電話で伝えることは難題です。

理解できている方にとっては、SNSで写真を送るなんて何でもない操作ですが、それを理解していない方に言葉で伝えることは非常に難しいものです。専門用語は不可。相手可以理解できる言葉を選んで説明しなければ伝えられません。

こんな経験もあります。一般農家に、ある実験の協力をお願いするためご自宅に訪問したことがありました。除草剤を提供する代わりに、ある期間内に除草剤を散布してもらうこと、散布後7日間は田んぼの水を外に出さない止水管理をしてもらうことを要望しました。お気づきかと思いますが、当協会が現在、本誌や新聞紙上等で提案している除草剤散布後、水田水がなくなるまで給水しない止水管理を検証するための実験です。若かりし私は、実験の内容をしっかりと理解してもらうことが協力していただく方に対する誠意だと思っておりました。ところが、説明しながら、先方には分からないだろうと思う単語を使わざるをえない語彙力のなさ。右から左へ素通りしているような先方の何とも言えない表情。話をしながら焦り、虚しさを感じた一時でした。先方としては、同行していただいた、今は亡き当時の業務科長との付き合いで承諾しただけであり、実験の内容や目的を理解する気はなく、逆に、さっさと帰って欲しいとさえ感じる空気感だったと記憶しています。

ただ、これには後日談があり、除草剤も散布し、目的通りの止水管理が出来、その後の調査をしていたある日、件の方が私に近づいてきて、「今年は、入水口周辺の草に良く効いている。」と感謝されました。更には、止水管理のメリットを体験したためか、来年からは自身も実践したいと話され、止水管理の普及ともなりました。

また、ある時、先述とは別の方の田んぼを借用し、実験終了の挨拶にご自宅に伺った折り、クログワイが多発した状態だったので効果のある中期剤を散布した方がいい旨伝えたことがありました。いくつかの有効剤と散布時期、散布の方法を口頭でお伝えしたのですが、「よくわからないから、あなたが選んで散布して」とのこと。田んぼを借りた手前、若かりし私は、断ることができない空気に抗えず、数日後30aの田んぼの中を除草剤片手に往復していました。商品名など1度聞いただけでは覚えられないのは道理であり、スマートフォンの画面で伝えられる現在とは違い、その当時、メモに書いて手渡しするなどの配慮が必要だったと反省しながら除草剤を散布していました。

これにも後日談があり、散布が終わって数日してご自宅に伺ったおり、散布を感謝された後、実は、脳梗塞の後遺症により農薬の散布は難しく、いつも親戚に散布の依頼をしているとのこと。何度も親戚に頼るわけにもいかず、田んぼを借りた手前、断れないだろう私に甘えてしまったと逆に謝られてしまいました。

父と除草剤の話をしてしているとき、彼の要望に即座に回答できるツールがあればいつも思います。間違っただけ解釈されそうな要素を出来るだけ排除し、大事な情報ほどシンプルで、且つ出来るだけ文字を少なくしてビジュアルを多用する。雑草毎に有効剤とその使用方法を掲載した当協会が提供するWebアプリ「除草カタログ」(本誌「広場」参照)は、これらの条件を全てクリアしている訳ではありませんが、伸び代のある期待の新人です。これから、掲載雑草数を増やし、コーナーも充実させることを計画しています。

コロナが明け、ワクチンも普及し帰省も自由に出来るようになりました。両親にスマートフォンの便利な使い方を直接会って教えることが出来そうです。